

当院における食事形態の調査

認知症の原因疾患の分類を通して

中川 真友子、川崎 真紀子、寄田 まなみ、和 淑梅、栗林 美貴子、柳田 勝

大阪 渡辺第二病院

I. はじめに

非認知症性高齢者だけでなく、認知症性高齢者においても「口から食べる」ことは重要な課題の一つである。そして、摂食障害、嚥下障害の確実な対応は、居宅においてだけでなく、病院など施設においても求められている。当院では、以前から栄養委員会やNST（栄養支援チーム）により、食事の内容、形態等の改善に力をいれてきており、誤嚥が認められる認知症性高齢者に対しては「ミキサー」や「とろみ」などのいわゆる「嚥下食」を用いて対応している。更に、経口摂取が困難な場合は、経鼻経管栄養法、中心静脈栄養法、胃瘻造設を行っている。

今回、当院の入院中の認知症性高齢者において食事の形態、投与方法について調査を行ったので若干の考察を加えて報告する。

II. 当院の概要

当院は、行動障害を伴う認知症性高齢者の治療に特化した精神科病院である。許可病床数は336床、6病棟を有し、在職職員数は190名である。

III. 対象と方法

平成18年5月15日現在、入院中の認知症性高齢者全員332名（男性156名、女性176名、平均年齢75.3±10.9歳）について、主病名、食事の形態、摂食方法について調査し、分析をおこなった。また、本研究は当院倫理委員会の承認を得て行った。

IV. 結果

入院中の認知症性高齢者の主病名は、アルツハイマー型認知症111名、脳血管性認知症104名、レビー小体病10名、アルコール性認知症41名、ピック病4名、統合失調症の残遺型33名、うつ病10名、頭部外傷7名、そ

の他12名であった。

食事を経口的に摂取している認知症性高齢者数は301名（91%）、経鼻経管栄養法2名（0.6%）中心静脈栄養法は1名（0.3%）、一時的な末梢静脈栄養法3名（1%）、胃瘻造設は25名（8%）であった。

食事の形態別では、まず、主食において米飯56名（17%）、粥177名（53%）、プリン食68名（19%）であり、次に、副食において、通常の形態33名（10%）、一口大29名（9%）、きざみ食162名（49%）、ミキサー食13名（4%）、プリン食64名（19%）であった。

全体では、米飯かつ通常の副食の形態を摂食している患者は41名（12%）であった。

疾患別においては、アルツハイマー型認知症ではプリン食またはミキサー食などの嚥下食が29名（26%）、経鼻経管栄養法、中心静脈栄養法、もしくは胃瘻造設などの非経口的摂食法は12名（11%）であった。次に、脳血管性認知症ではそれぞれ31名（30%）、9名（9%）、アルコール性認知症では5名（12%）、3名（7%）、統合失調症の残遺型では2名（6%）、1名（3%）であった。

年齢別では80歳以上の入院認知症性高齢者129名中、米飯かつ通常の副食の形態を摂食しているそれは9名（7%）であった。

V. 考察

今回の調査の結果、アルツハイマー型認知症を有する入院高齢者と脳血管性認知症を有する入院高齢者において、プリン食もしくはミキサー食の嚥下食や胃瘻への移行頻度など食事形態に明らかな差異は認められなかった。